

# カニシュ（アナトリア）における 古アッシリア時代の商人と文書

セシル・ミツシエル\*  
唐 橋 文 訳

紀元前2千年紀初頭、ティグリス川流域のアッシウル市の商人たちがアナトリア（トルコ）ときわめて規模の大きい商取引を始めた。その一因に、アッシウル市が、イラン・メソポタミア南部からシリア・アナトリアにいたる主要な街道上で戦略的に重要な位置を占めていたことが挙げられる。アッシリアの商人たちはアッシウル市に妻や家族を残して中部アナトリアに出かけ、錫と織物を輸出し、金・銀を持ち帰った。輸出用の織物の一部は、そういった商人の家族の女性たちによって生産された。そして、このような商取引はアナトリアの地元の統治者たちとのあいだに結ばれた協定によって守られていた。これらの事柄は、カイセリ近くの遺跡カニシュ（現キュルテベ）で発掘された、前19世紀のアッシリア商人たちの粘土板文書から知ることができる。

今回の講義では、カニシュで発掘された古アッシリア時代の楔形文字文書を概観した後、1993年に発見されたアッシリア人家族の保管文書について触れ、また、アッシリア人がアナトリアとのあいだに確立した長距離交易と多種多様な商取引の関係、さらに、カニシュの商人居留地（下の町）におけるアッシリア人とアナトリア人の関係について見ていきたい。

---

\* フランス国立科学研究所上級研究員 (Centre National de la Recherche Scientifique, Senior Researcher)

## 1. カニシエ文書が描く古アッシリア時代

### 1.1. アッシュル

アッシュル市は、イラク北部のモスル市の南およそ100km、ティグリス川西岸の川に突き出した岩盤の岬に建設された。



図1 Andraeによるアッシュルの地図

アッシュル市の発掘は100年以上も前に着手された。まず、1903年、ドイツ人の建築家 Walter Andrae が新しい考古学の方法を採用して、アッシュル市の精確な地形図を作成した。しかし、発掘は30年足らずで終わってしまった。その後、1970年代末、イラク政府により、城壁の周りやジックラト、アッシュル神殿で一部修復がなされた。2000年と2001年には、マコウル (Makhoul) に大規模ダムの建設計画がもちあがり、遺跡が脅かされたのを受けて、ドイツとイラクが共に救済プロジェクトに携わった。その

カニシュ（アナトリア）における古アッシリア時代の商人と文書（唐橋）

後、ダム建設は中止され、2003年3月以降、遺跡は手厚く保護されている。イラク南部の他の場所でみられるような略奪行為も、ここでは起らなかったようである。2003年6月、アッシュルはユネスコの世界遺産に登録され、さらに、危機にさらされている世界遺産のリストにも掲載された。

アッシュルには、前3千年紀初頭から人々が住み始め、前3千年紀中葉以降には文書にも言及されるようになる。その後、アッカド王朝とウル第三王朝の支配下に入るが、ウル第三王朝の崩壊後独立し、少数の有力な商人たちが主導権を握る都市国家となった。この前2千年紀最初の300年間を通常「古アッシリア時代」と呼ぶ。当時の町の面積はおよそ40haに達し、そこには数千人の人々が住んでいたものと考えられる。



図2 古アッシリア時代のアナトリアの地図

参考文献：Michel, C. (2008), The Old Assyrian Trade in the Light of Recent Kültepe Archives, *Journal of the Canadian Society for Mesopotamian Studies* 3, pp. 71-82 (<http://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-00642827/fr/>)。

しかしながら、この時代の考古遺物はほとんど発見されていない。後代の地層の下にある古アッシリア時代の層の発掘があまり進んでいないからである。現在の段階で、古アッシリア時代（あるいはより早い時代）に遡る主な建造物は公共的あるいは宗教的性格を有することが判明している。しかし、当時の港はまだ確認されておらず、現在の墓地の下に埋もれている可能性もある。また、アッシュルからは粘土板文書もあまり出土していない。後の地層に混じって発見された、古アッシリア時代に由来する練習用テキスト24点と、主に神殿から出土した王碑文およそ30点を数えるにすぎない。以上のことから明らかなように、アッシュルから出土した文書だけで前2千年紀初期のアッシュルの歴史を再構成することは不可能である。

## 1.2. カニシュ

アッシュルからの文書の出土状況は良くないのだが、幸運なことに、それを埋め合わせるかのように、小アジア、特にカニシュに居住した商人たちの個人的なアーカイヴが数多く見つかっている。実際のところ、古アッシリア時代の文書の99%はカニシュから出土しており、アッシュルから1,000km以上も離れた場所で見つかったこれらの文書が、アッシュルの歴史の再構成を可能にしているのである。

キュルテバ遺跡が発見されたのは19世紀の後半であったが、1881年にはそこからの粘土板がマーケットに現れ始めた。現在のカイセリの北東21kmの地点にあるその遺跡は、1924年、Benno Landsbergerによって古代のカニシュと同定された。

そこではフランスやチェコも発掘を行ったが、トルコ歴史協会の援助を受けて、アンカラ大学のTashin Özgüç教授が公式に発掘を始めたのは1948年のことであった。2005年10月にÖzgüç教授が亡くなり、2006年以降、発掘はFikri Kulakoğlu教授の指揮下で続いている。古アッシリア時代の粘土板文書は毎年新たに発見され、これまで合わせて22,500点を数え



図3 トルコ・キュルテベ発掘隊長。1948年から2005年まで Tashin Özgüç（左）、2006年から Fikri Kulakoğlu（右）

る。これは、古代オリエントの一地点が産出する楔形文字資料の量としては、最大の部類に属す。

カニシュの町は大きく2つに分けられる。ひとつは要塞（citadel）で、もうひとつは、考古学者たちがしばしばカールム（kārumu）と呼ぶ商人居留地（下の町）である。この用語は、アッシリアの商業地区および商人たちの組織と管理・行政の建築物を指す。商人居留地（下の町）は4つの居住層を含むが、粘土板文書が発見されているのは第II層（前1945～1835年頃）と第Ib層（前1832～1700年頃）のみである。

要塞の大部分は不法な発掘によって破壊されてしまった。それでも、60の部屋数を持つ巨大な宮殿——その最後期は商人居留地（下の町）の第Ib層と同時代——が存在したことが明らかになっている。この建物からはものが運び出されて、火で燃え尽くされる前に空っぽになっていたため、粘土板文書もここからは発見されていない。要塞では、全部で40余りの粘土板文書しか見つかっておらず、土地の支配者の公文書館の在処はまだ判明していない。

商人たちが住んでいた下の町は要塞の北東に位置する。その主な層であ



図4 キュルテペのグーグルアース・ビュー

る第Ⅱ層は、大きな通りと広場によっていくつかの地区に分けられていた。粘土板文書は20～30点ずつかご・箱・つぼ等に入れられ、捺印された粘土製のラベルを付されて、家の倉庫の木製棚に保管された。

家々からは、儀式に用いられた器やリュトンを含むいろいろな家財道具が出土した。武器や金属製のつぼ、小像、装身具等は、家の床下の墓から発見された。第Ⅱ層の末期に多くの家々が焼失したが、それが粘土板を焼成することになり、かえってその保存性を高めた。

次の第Ⅱb層では、商人居留地（下の町）の面積は縮小したが、住民の数はあまり変わらなかった。しかし、粘土板文書は、第Ⅱ層の22,000に比べると極めて少なく、500にも満たない。第Ⅱb層も火事によって破壊された。アッシュルとカニシュの他に、後のヒッタイト王国の都ハットゥシャ



図5 箱に入れられていた粘土板文書（箱は消滅）（左）と  
つぼに入れられた粘土板文書

やアリシャル（古代のアムクワ）等から古アッシリア時代の粘土板文書が  
およそ180出土している。実際のところ、アッシリア人はアナトリアの40  
余りの町々に居住していたのであった。

発掘された古アッシリア粘土板文書の数						
カニシュ	22,500	要塞	40	商人居留地 II 22,000	商人居留地 Ib	460
ハットウシヤ	72					
アリシャル	63					
アッシユル	24					

参考文献：Kulakoğlu, F. & Kangal, S. (eds., 2010), *Anatolia's Prologue, Kültepe Kanesh Karum, Assyrians in Istanbul*, Kayseri Metropolitan Municipality Cultural Publication 78, Istanbul; Michel, C. (2003), *Old Assyrian Bibliography of Cuneiform Texts, Bullae, Seals and the Results of the Excavations at Aššur, Kültepe/Kaniš, Acemhöyük, Alishar and Bogazköy*, Old Assyrian Archives Studies 1, Publications de l'Institut historique-archéologique néerlandais de Stamboul, vol. XCVII, Leiden; Michel, C. (2006), Old Assyrian Bibliography 1 (February 2003 – July 2006), *Archiv für Orientforschung* 51, pp. 436-449; Michel, C. (2011), Old Assyrian Bibliography 2 (August 2006 – April 2009), *Archiv für Orientforschung* 52, pp. 416-437.

### 1.3. 古アッシリア時代の粘土板文書

古アッシリア時代の一般的な粘土板文書は四角形もしくは長方形で、大きさは2×3 cmから最も大きいもので20×10 cm程である。全面に小さな文字がびっしり刻まれている。粘土板は火で焼かれることはなく、天日で乾かされるのが普通であった。しかし、先にも述べたように、火事がカニシュの居留地区（下の町）の家屋を多数破壊した際に、その火がそこにあった粘土板を焼成した。こういった粘土板の保存状態は極めて良好である。



図6 1993年にキュルテベで発掘された古アッシリア粘土板  
表面を中心にその左端、下端、右端（左）。裏面とその下端および右端（右）

キュルテベで発見された多数の楔形文字文書のうち、手紙類と契約類はもともと粘土製の封筒に入れられていた。手紙の送り主は、封筒に自分の円筒印章をこらし、自分の名前と受取人の名前を記した。手紙が目的地に届くと、受取人が封筒をこわし、中身を取り出して読んだ。契約書の封筒には、契約の要約が記され、当事者と証人たちの印影が残された。多くの契約書が封筒に入ったまま、商人のアーカイヴで保管されており、封筒が契約書の法的価値を保証するものであったことがわかる。





図7 一部こわれた封筒と中の手紙

カニシュの粘土板文書は、居留地区（下の町）に住むアッシリア人商人たちが個人的に保管していたものである。その30～40%が、カニシュ在住のアッシリア人商人と、アッシュル市もしくはアナトリアの他のアッシリア人居住地に住む家族や同僚たちとの間に交わされた私信である。これらの書簡は、商取引の仕組みについてだけでなく、家庭の出来事や日常生活についても貴重な情報を有している。その次に数の多いのが、ローン、売買契約、商売や金融に関する訴訟や判決等の法的な文書である。三番目のカテゴリーは様々なリストや通知、メモ等で、およそ20～30%を占める。この他に、粘土製のラベルや、銘文を有す印章および印影がある。

参考文献：Larsen, M. T. (2008), Archives and Filing Systems at Kültepe. In C. Michel (ed.), *Old Assyrian Studies in Memory of Paul Garelli*, Old Assyrian Studies 4, PIHANS CXII, Leiden, pp. 77-88; Michel, C. (2008), La correspondance des marchands assyriens du XIXe s. av. J.-C.; de l'archivage des lettres commerciales et privées. In L. Pantalacci (ed.), *La lettre d'archive. Communication administrative et personnelle dans l'Antiquité proche-orientale et égyptienne*, *Topoi*, Suppl. 9, pp. 117-140 (<http://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-00644198/fr/>); Veenhof, K. R. (2013), The Archives of Old Assyrian Traders; Their Nature, Functions and Use. In M. Faraguna (ed.), *Archives and*

#### 1.4. 事例研究：1993年に発掘された文書群

キュルテベ文書は、1980年代まで主にトルコ人のアッシリア研究者たちによって解読されてきた。筆者は、1991年にこれらの文書研究に携われることができるようになった最初の外国人のひとりである。現在はデンマークやフランス、ドイツ、オランダ、トルコ出身の10人あまりの専門家たちによって読解作業がなされている。これまで、発見された文書のおよそ3分の2が解読・研究されたが、刊行されたのはまだ30%にも満たない。

1993・1994年に、ひどくこわれている2軒の家（LVII-LVIII/127-128）から、およそ1,000点にのぼる粘土板文書が見つかった。そのほとんどが、アッシリア商人の一家族三世代に属するもので、イディン・スエン（Iddin-Suen）の息子アラーフム（Alāhum）とその息子アッシュル・タクラーク（Aššur-taklāku）が保管していたものであった。その中で最も数の多いのが書簡で、全体のおよそ40%。その他、債権者のために作成されたローン契約書が12%、それ以外の契約書が9%、訴訟関係文書が7%を占める。文書を保管していた当人によって書かれた帳簿もある（15%）。

アラーフムに関連する書簡はおよそ50通残存しているが、そのほとんどは、彼が（他所から）カニシュの家に住む彼の家族宛に書いたものである。その中には、息子のアッシュル・タクラークに宛てた書簡も10通含まれている。アラーフムは、アッシュル市に妻のアブ・シャリム（Ab-šalim）が住む家を所有し、さらに、ブルシュハットゥム（Burušhattum）にも家を1軒所有していた。したがって、彼はこの2軒の家にも文書を残した可能性があり、彼のカニシュ文書は彼の活動の一部を物語るにすぎない。カニシュの家からは、また、彼が債権者になっている11のローン契約文書（前1894～1879年頃）や、彼がいくつかの訴訟に関係していたことを記す



図8 1993年に発掘された粘土板文書

文書も見つかっており、アラーフムがそこにある期間住んでいたことが考えられる。金を貸し付ける際には、後に支払いが滞った場合、貸し付けがなされたことの証拠とするために、誰にいくら貸し付けたかを記す文書が作成されたが、それらの文書は債権者が所有保管した。アラーフムは、アッシュル市から錫と織物を発送したり、また、カニシュでは、アッシュル市から送られてきた商品を受け取ったりした。彼は死後に、莫大な借金を家族に残した。

1991年に、彼の兄弟のひとりエラムマ（Elamma）が保管していた文書類が、近くから発掘された。それらは Klaas Veenhof によって研究され、その結果、エラムマの家族を含めたアラーフム一族の家系図を作成することが可能になった。

すでに述べたように、1993年に発掘された2軒の家から多数の文書類が見つかったわけであるが、その大部分がアラーフムの息子アッシュル・タクラークのものであったことが判明した。それらの中には、そこで彼が受け取った書簡およそ70通と、商用でカニシュを離れた時に、そこに住んで

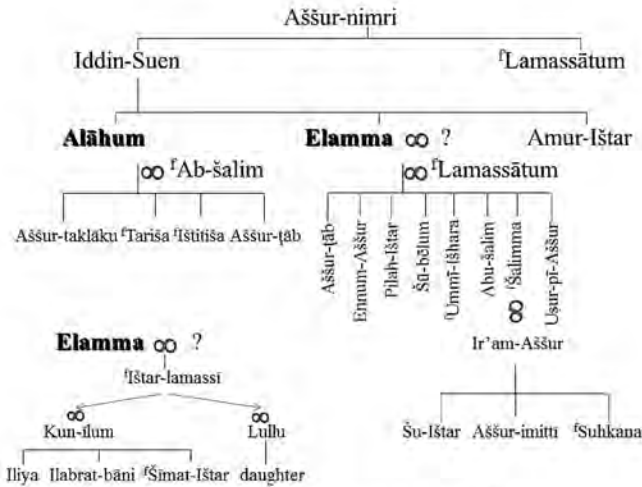


図9 アラーフムとエラムマの系図

いた家族宛に彼自身が送った70通が含まれている。また、彼が債権者であることを示すローン文書が50ほどあり、カニシュで彼が銀を貸し付けていたことがわかる（前1878～1860年頃）。さらに、彼が関係する裁判や他の商人たちとの争いを証言する訴訟関係文書も30余り残されている。アッシュル・タクラークは織物取引にも従事していて、アナトリアのタウイニヤと取引があったことに言及する文書も数多くある。タウイニヤはある町と対立関係にあり、彼とカティムムという商人がそれに関わっていた。アッシュル・タクラークは、その町の君主と君主妃に、自分たちの敵であるタウイニヤの君主に粘土板と製品を運ばせた廉で告訴され投獄された。彼らは、アッシリア当局が有罪の商人を連れて来るか、あるいは、鉄1ミナと金10ミナという多額の釈放金を払うならば、アッシュル・タクラークを解放しても良いと同意した。結局、アッシュル・タクラークは2年近くを牢獄で過ごし、彼の梱包された織物と羊毛は衣蛾に食われてしまったのであった。



図10 アッシュル・タクラクの印章

アラーフムには、タリシャ (Tariša) とイシュティティシャ (Ištitiša) という名前の娘があった。タリシャは、カニシュに居住する前、アッシュル市で織物生産に携わっていた。彼女がカニシュで受け取った書簡が26通、送った書簡が7通発見されている。彼女が受け取った書簡のうち、そのほとんどが兄弟のアッシュル・タクラクによって書かれたもので、父アラーフムが死んだ時、町当局と何人かの同業者たちに負債があったことがわかる。ある手紙によると、それは銀2タラント30ミナにもものぼっていた。

イシュティティシャは、アニーヌムの息子アッシュル・マリクと結婚するはずであった。しかし、アッシュル・マリクが遠くにいたため、なかなか結婚が実現しなかった。そこで、カニシュのカーラムは、アッシュル・マリクが6週間以内に戻ってきて婚約者のイシュティティシャと結婚しなければならぬという判決を下した。しかしながら、前1866年頃の3月以降、婚約は解消され、イシュティティシャはティシュピシュ (Tišpišu) という名前のアナトリア人と結婚することになった。父アラーフムがその結婚の段取りをしていたが、彼の死後、兄弟のアッシュル・タクラクが彼女の後見人になった。

1993 at Kültepe Kaniš, *Altorientalische Forschungen* 35, 2008, pp. 53-67 [abstract *Altorientalische Forschungen* 35, p. 359].

## 2. アナトリアにおける古アッシリア時代の交易

### 2.1. 商品、販売、収益

カニシュ出土の古アッシリア粘土板文書は、前20～18世紀アッシル商人たちによってアッシル市とカニシュの間で行われた継続的な交易の記録である。彼らは錫と織物を小アジアへ輸出し、金・銀を持ち帰った。アナトリアでは青銅の生産が盛んで、実際にカニシュでは青銅の武器や道具の鑄型が多数見つかっている。それらの青銅製品の製作に不可欠であった錫は東のウズベキスタンで産出し、おそらくエラム人によってアッシル市に運ばれたと考えられる。アッシル市はちょうど錫交易のルート上にあり、その地理的な恩恵に浴したのであった。

織物はアッシル市で生産されるものも輸入されてくるものもあった。輸入ものは「アッカド」織物と呼ばれ、バビロニア人によってアッシル市に運ばれた。アッシル市では、宮殿や神殿等に付属するような織物業場は発見されておらず、地元産の織物はおもに女性たちが家で小規模に営む家内産業の産物であった。アッシル人女性は夫についてアナトリアに行くことはせず、世帯主として地元に残った。彼女たちの手に成る織物は家族の着用に用いられただけでなく、アナトリアへの重要な輸出品でもあった。羊毛を紡ぐことと布を織ることは家の女たち——老いも若きも、また女奴隷たちも——の主な仕事であった。富裕な家には10人あまりの織り手がいたと思われる。アッシリアのファッションと技術はアナトリアで非常に好まれ、アッシリアからの織物製品は自己顕示の手段となった。商人である夫たちは製品の質を高めるために自分の妻にいろいろとアドヴァイスしていたことが、次のような妻から夫への返事に読み取ること

ができる。

「小さすぎるし、質も良くないとあなたが私に書きよこした織物のことですが、私がサイズを小さくしたのは、あなたからそうするようになると言われたからではありませんか。今になって、もう2分の1ミナの羊毛を足して織れと言うのですか。私はそのようにしていたではありませんか。」

女性たちの織物生産は有償でなされた。筆者は、文書で得られたデータと出土した織物道具を用いた実験考古学に基づいて計算した結果、各家で織物生産に携わる女性たちは、アッシュル市に小さな家を一軒購入することが可能なほどの収入を毎年得ていたという結論にいたった。

商品はアッシュル市で封印された後ロバに積まれ、6週間かかってアナトリアのカニシュに運ばれた。そこで荷は積みおろされ、宮殿で税金が支払われた。アッシリア人は、錫と織物をカニシュで直接現金で売ることもできたし、また、期間を定めて代理人（外交販売人）に掛け（クレジット）で売ることもできた。

代理人（外交販売人）たちは高値で商品を売るためにアナトリア中を回った。ロバも、アッシュル市への復路にはそれほど必要性がなかったので、アナトリアで多くが売り払われた。アッシリア商人たちは、マルディンから産出した金とタウルス山地から出土した銀を持ち帰った。銀はアッシュル市とアナトリアの両方で精錬され管理された。商業ローンの負債額は銀で見積もられた。銀はエラム人から錫を購入する際に用いられるなど、次のキャラバンを組織するために直ちに投資された。アッシュル市にもたらされた大量の銀は外国人商人たちをも引きつけた。キャラバンに投資されなかった富は借金の返済、贈与あるいは不動産の取得に使われた。

毎年このようにおよそ100kgの金・銀がアッシュル市に持ち込まれ、一部の商人たちは投資によって巨大な富を築き上げた。実際、アナトリアで

## The Aššur - Kaneš trade

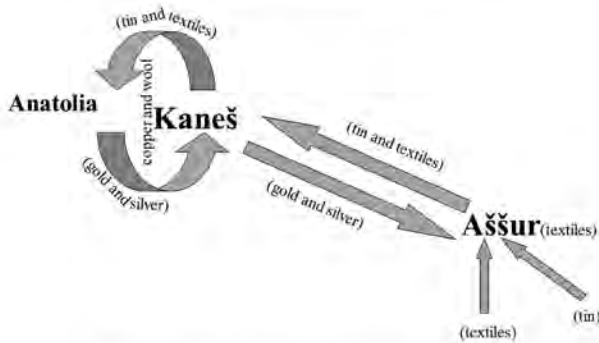


図11 アナトリアにおけるアッシリア交易

は、錫は通常の2倍、織物は3倍の値段で売ることができたのであった。しかしながら、アッシリア商人たちは、収益の中からアッシュル市とアナトリア当局にさまざまな種類の税金を支払わねばならず、その負担はかなり大きかった。

隊商に課せられた各種の税金

税金の種類	課税地	課税の組織	税金額
<i>wašitum</i> 輸出税	アッシュル市	市役所	隊商の商品総額の1/120 (錫換算)
<i>dātum</i> 隊商税	途上	地元当局	隊商の商品総額の10% (錫換算)
<i>qaqqadātum</i> 人頭税	途上	地元当局	1人当り錫10-15シケル
<i>nishatum</i> 輸入税	カニシュ	王宮	錫の3%、織物の5%
<i>išrātum</i> 10分の1税	カニシュ	王宮	織物の10%を低価格で購入
<i>šaddu'atum</i> 輸送税	カニシュ	カールム当局	アッシュル市にもたらされる金銀の1/60
<i>nishatum</i> 輸入税	アッシュル市	市役所	輸入される貴金属の4%



参考文献：Dercksen J. G. (2005), Metals According to Documents from Kültepe-Kanish Dating to the Old Assyrian Colony Period. In Ü. Yalcun (ed.), *Anatolian Metal III*. Der Anschnitt, Beiheft 18, Bochum, pp. 17-34; Larsen, M. T. (1967) *Old Assyrian Caravan Procedures*, PIHANS XXII, Istanbul; Michel, C. (2005), Le commerce privé des Assyriens en Anatolie modèle du commerce archaïque selon K. Polanyi. In P. Clancier, F. Joannès, P. Rouillard and A. Tenu (eds.), *Autour de Polanyi, vocabulaires, théories et modalités des échanges*, Colloques de la Maison René-Ginouvès 1, Paris, pp. 121-133 ([http://halshs.archives-ouvertes.fr/docs/00/35/17/90/PDF/Michel\\_2005\\_ColloquesMRG1.pdf](http://halshs.archives-ouvertes.fr/docs/00/35/17/90/PDF/Michel_2005_ColloquesMRG1.pdf)); Michel, C. and Veenhof, K. R. (2010), The Textiles Traded by the Assyrians in Anatolia (19th-18th Centuries BC). In C. Michel and M.-L. Nosch (eds.), *Textile Terminologies in the Ancient Near East and Mediterranean from the Third to the First Millennia BC*, Ancient Textiles Series 8, Oxford, pp. 209-269; Veenhof, K. R. (1988), Prices and Trade: The Old Assyrian Evidence, *Altorientalische Forschungen* 15, pp. 243-263.

## 2.2. 交易と組織

アッシリア人たちはアナトリア内のおよそ40の町々（商品の仕向け先あるいは金属加工の重要な場所）に居住していた。具体的には、カニシュの他におよそ20のカーラム（商人居留地）、およびそれとほぼ同数の規模の小さい交易集落（*wabartum*）があり、それらは全てカニシュからの指示に従っていた。アッシリアの行政機関はカニシュにおかれていたが、通商事務所（*bēt kārim*）として機能する公の建造物はまだ発掘されていない。通商事務所はアッシュル市政府の出先機関で、隊商への課税、貸付け利子の歩合の設定、アッシリア商人による投資貸付けや委託金の管理、年に2～3回の決算処理などを行った。また、対外的には、アナトリア当局の役人たちからアッシリア商人の利益を守り、地元の支配者たちと協定を結ぶなどした。

アナトリアにおける古アッシリア時代の交易は平和裡に始まり継続された。それは、相互の商業利益に基づいて地元の支配者や住民と良い関係を築くことができたからである。農業と銅鉞山に財力の基盤を持つアナトリ

アの王家は、錫と高価な織物類をアッシリアとの交易から得ていた。両者は相互の利益を認めることに宣誓をもって同意し、リスクを最小限にするための協定と申し合わせに基づいて商取引を行った。アナトリアの支配者は、アッシリア人に入国権を認め、領土内でキャラバンが盗賊から被った損失を補償し賠償金を支払った。商人たちはカールムの行政当局下におかれ、治外法権を有していた。それと引き換えに、商人たちは地元の支配者にキャラバンにかけられた関税を支払い、織物の10%を優先的に先買いする権利を認めた。アナトリアの支配者たちは交易から利益を得るために協定を結ぶことに熱心であった。そして、アッシリア商人にとって、これらの協定がまさに自分たちの利益を守るための法的手段であった。いずれにしても、通商協定は両者の利益、ひいては平和的な共存を保証するものであった。



図12 古アッシリア時代の契約文書（第1b層）

参考文献：Dercksen, J. G. (2004), *Assyrian Institutions*, MOS Studies 4, Publications de l'Institut historique-archéologique néerlandais de Stamboul 98, Leyde; Günbath, C. (2004), Two Treaty Texts Found at Kültepe. In J. G. Dercksen (ed.), *Assyria and Beyond. Studies Presented to Mogens Trolle Larsen*, PIHANS C, Leiden, pp. 249-268; Larsen, M. T. (1976), *Old Assyrian City-State and its Colonies*, Mesopotamia 4, Copenhagen; Michel, C. (2001), *Correspondance des marchands de Kaniš au début du IIe millénaire avant J.-C.*, Littératures Anciennes du Proche-Orient 19, Paris; Veenhof, K. R. (2008), Aspects of Old Assyrian Commercial Law Treaties and Legislation. In M. Liverani & C. Mora (eds.), *I diritti del mondo cuneiforme (Mesopotamia e regioni adiacenti, ca. 2500-500 a.C.)*, Collegio di Diritto Romano 2006 Cedant, Pavia, pp. 247-269; Veenhof, K. R. (2010), Ancient Aššur: The City, its Traders, and its Commercial Network, *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 53, pp. 39-82.

### 2.3. パートナーシップ

アッシリア商人たちは、個人でアッシュル市とカニシュ間の交易事業全面に対処することは不可能だったので、相互間および契約による代理者のネットワークを組織し、その中でそれぞれが定められた役割を果たした。

カニシュで発見されたローン契約書のほとんどが、商人の売却する商品に関する商業ローンである。アッシリア人たちは、直接に品物を売って現金を得るよりも、代理人（外交販売人）や小売業者を雇い、信用貸して彼らに品物を預け、後に支払いを受けるほうを好んだ。借り手が押印した文書と引き換えに商品が渡され、銀で負債が計算され、返却日が設定された。当然ながら、この種の事業は商品の荷主にとってかなりのリスクを内包していた。代理業者が委託された品物を持って逃げたり、未払いだったりしたケースが文書に多々見られる。そのようなローン契約では、支払い期限の過ぎたものに利子がついた。その他のローン契約では、通常利子が固定されており、年30%にのぼった。この高い利率は、ローンが商業用で、しかも、アナトリアとアッシュル市の間で銀に高い価値が付加されていたためである。

単なる雇用契約とは別に、パートナーシップ、すなわち、1～2人の出資者が必要な資本を提供し共同で事業を企画する形態もあった。*ummi'ānum* と呼ばれる出資者は、アッシュル市の裕福な家の当主たちであった。彼らは貸出し銀行の働きをし、アッシュル市を出発するキャラバンにかなりの銀を投資した。また、*tamkārūm*（商人）と呼ばれる人々の中にもしばしば出資者がいた。彼らは、商会のアナトリア支部の長であったり、アナトリアへの輸出品の小売業者であったり、また、代理の外交販売人であったりした。人々が金を借りるために *tamkārūm* の家へ行くという記録も残っている。古アッシリア時代の *tamkārūm* は明らかにアッシュル市政府から自由であったと考えられる。

特殊な場合、債権者は法律によって守られていた。例えば、代理業者がアナトリアで死亡した場合、彼の所持品は全てアッシュル市に運ばれ、それが家族の手に渡る前に、先ず債権者が自分の投資した額をそこから取り戻した。それについて、ある書簡は次のように記している。

フラーツァーヌムが死亡した時、債権者たちが家に押し入って金庫を封印しました。彼が死亡した時、あなたに手紙を書き送らなかったのはそのためです。債権者たちが清算した後、詳しい報告を書き送ろうと考えたのです。債権者たちは、利子を軽減（免除）し、当然支払われるべき額の銀を取り戻しました。彼らは粘土板文書と負債者の両方を「貪り食い」十分に満足しました。

商売を協同で行う条件に応じて多種多様な契約関係があった。これらの協同事業は、その期間がまちまちで、長期におよぶこともあったが、ある特定の事業の一往復に限った契約もあった。短期の事業のうち *tappā'utum* パートナーシップと呼ばれるものでは、ある特定の商業活動を始めるにあたって、提携者がそのパートナーに出資し、事業終了後、パートナーは借

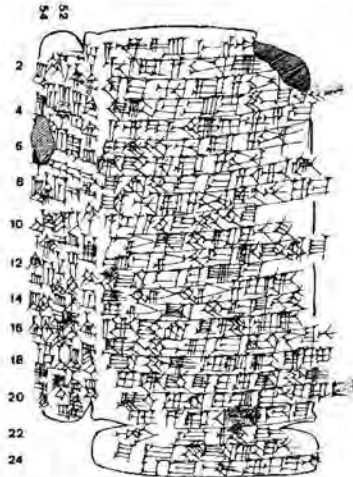


図13 プラーツァースムの死に関する書簡（C. Michelによるコピー）

金を清算し、利益を等しく分配した。次のような記述から、*tappā'utum* は一時的な提携関係で、その目的は明確であったことがわかる。

インナーヤとあなたを含む4人は *tappā'utum* パートナーシップを結びました。そのうちの誰も投資をしませんでしたが、債権者の代表インナーヤが隕鉄を購入するため資本金として銀20シキルをあなたに渡しました。

しかし、このパートナーシップは上手くいかなかった。すなわち、鉄はほとんど購入されることなく資金がパートナーのひとりによって浪費され、地元当局との争いから何人かが投獄されたのであった。もうひとつの短期の事業は、隊商を意味する単語で *ellātum* と呼ばれた。数人の投資家が商品を持ち寄りカニシュへの一往復を組織した。商品を売却してアッシェルに戻った後、装備やサラリー、経費等の投資額に応じて利益が分配さ

れた。

カニシュ文書によく見られるのは、長期にわたる *naruqqum* 契約である。数人の債権者が、*naruqqum* と呼ばれる袋にかなりの額の資金を入れ、それを代理業者に委託した。15人が12年にわたって金30ミナをひとりの代理業者に委託した記録がある。この文書には、投資者のリスト、金の投資額、代理業者の氏名、契約の条件が記されている。代理業者は長期にわたって雇われ、商取引で可能なかぎりの収益をあげることが期待された。代理業者は、同時にいくつもの *naruqqum* 契約を結ぶことはできなかったかもしれないが、契約は更新可能で、生涯継続することもあった。信頼できる関係が非常に大切で、投資者は評判の良い代理業者を使うことを好んだ。アッシュル・イディーが息子に与えたアドヴァイスによると、*naruqqum* 袋に投資することで社会的な承認が得られたことがわかる。

ここ（アッシュル）に乗なさい。お前より劣っている人たちが *naruqqum* 袋を運営し、私より劣っている人たちが金10ミナを投資した。ここで *naruqqum* 袋を引き継いでから行きなさい。

代理業者はアナトリアで商品を売却して生じた収益の3分の1を取り、債権者は3分の2を投資額に応じて分配した。アッシュル市在住の債権者とアナトリアで活動する商人の関係を規定するこれらの契約が、アッシリア交易の基本であった。

参考文献：Dercksen, J. G. (1999), On the Financing of Old Assyrian Merchants. In J. G. Dercksen (ed.), *Trade and Finance in Ancient Mesopotamia*, MOS Studies 1, Leiden, pp. 85-99; Larsen, M. T. (1977), Partnerships in the Old Assyrian Trade, *Iraq* 39, pp. 119-149; Larsen, M. T. (2002), *The Aššur-nādā Archive: Old Assyrian Archives* 1, PIHANS XCVI, Leiden; Michel, C. (1991), *Innāya dans les tablettes paléo-assyriennes*, Paris; Veenhof, K. R. (1999), Silver and Credit in Old Assyrian Trade. In J. G. Dercksen (ed.), *Trade and Finance in Ancient*

## 2.4. 家族会社

信頼できる提携者を探して契約を結ぶよりも、家族の絆で結ばれた身内のほうが不正も起りにくく事業がしやすかった。大きな商家は会社に組織され、家族のメンバーはアッシュル市とアナトリアでそれぞれの役割を分担した。当主（父親）がアッシュル市から事業を指揮し、商品を手入れし、隊商を組織してカニシュに送った。長子はカニシュに住んで、家族会社のアナトリア支店を率いた。彼は隊商を迎え入れ、商品の売却を組織した。他の息子たちは他の交易集落に住んで商売をし、末子はアッシュルとアナトリア間を行き来して商品を運んだ。父親が死ぬと、長子が会社の経営を引き継いだ。家の女たちは、織物を生産して家族ぐるみの商売に貢献した。それと引き換えに、彼女たちは貴金属や宝飾品をもらって家を切り盛りし子供たちを育てた。このように、家族は古アッシリア時代の商業システムにおいて非常に重要であったが、他方、資本は個々人が所有していたことを心に留めておく必要がある。

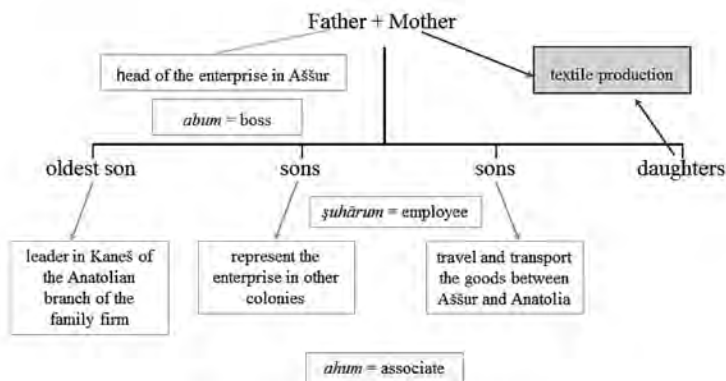


図14 アッシリアの家族会社のモデル

参考文献：Larsen M. T., 2007, "Individual and Family in Old Assyrian Society, *Journal of Cuneiform Studies* 59, pp. 93-106; Michel, C., 2001, *Correspondance des marchands de Kanis au début du IIe millénaire avant J.-C.*, Littératures Anciennes du Proche-Orient 19, Paris.

### 3. カニシュ商業地区におけるアッシリア人とアナトリア人

アッシリア人商人たちは、アナトリアの地元当局だけでなく、カニシュやその他のアナトリアの町々でアナトリア人や他の外国人たちと日々接触を持った。

#### 3.1. 商業地区の居住者たちと交易

カニシュ在住のアッシリア人たちは、行政および法律の面で地元当局から独立していたが、アッシュル市の政府とはカニシュのカーラムを通して結びついていた。アッシリア人と地元当局のやりとりは、カーラムの代表者と地元の支配者が結んだ協定に規定されていたが、それは、また、アッシリア人を保護するものでもあった。アナトリアで商売をするアッシリア人たちは、必ずしもアッシュル市の最も富裕な階級に属するとは限らなかったが、一般的に地元の住民よりは裕福で、アナトリアでたちまちのうちに主要な債権者になっていった。

カニシュの商業地区（下の町）で、アッシリア人たちは、数多くの様々な人々と商売をしたが、彼らを一様に「現地の（アナトリア）人」を意味する *nu'ārum* という一般的な単語で呼んでいた。アッシリア人にとってこの単語は軽蔑的な意味あいを持つものではなかった。一方アナトリア人たちはアッシリア人を *tamkārum*（商人）と呼んだ。商業地区に住むアナトリア人も大半が商人で、ヒッタイト語あるいはルウィ語、もしくはハッティ語の名前を持っていた。ヒッタイト人とルウィ人は、どちらも印欧系で、前3千年期末に中央アナトリアに移り住んだと考えられる。そこで



は、前19世紀以降ヒッタイト語が主要言語となった。アッシリア人とアナトリア人は、日々の接触で異なる言語を使用したわけであるが、それが両者のコミュニケーションを妨げることにはならなかったらしい。通訳はそれほど数はいなかったが、両者の商業・外交関係を維持するために主に行政機関によって雇われていたと思われる。通訳たちは、カニシュで商売をしている他の外国人にもサービスを提供した。実際にカニシュ出土の文書は、アモリ人やフリ人のように、自分たちの話す言語によって、あるいは、エブラ人のように、その出身地によって区別された外国人グループに言及している。これらは、アナトリアと北シリアの間に交易が盛んに行われていたことを示すものである。

基本的には、アッシリア人とアナトリア人の関係は交易を介するそれであった。当初、アナトリア人はアッシリア人の顧客であった。彼らはアッシリア人から品物を購入し、現金であるいはクレジットで支払った。購買力のない人々は、しばしば、アッシリア人に小額の銀や銅、あるいは穀物等を負う債務者として文書に現れる。アッシリア人は、地元のマーケットで穀物、奴隷、動物等、様々な必需品を購入することができた。しかし、アッシリア人とアナトリア人の関係は単に交易的なものを超えて発展し、次第に、両者間に文化の借用も見られるようになっていった。

参考文献：Dercksen, J. G. (2004), Some Elements of Old Anatolian Society in Kanis. In J.-G. Dercksen (ed.), *Assyria and Beyond, Studies Presented to Mogens Trolle Larsen*. PIHANS C. Leiden, pp. 137-178; Goedegebuure, P. M. (2008), Central Anatolian Languages and Language Communities in the Colony Period: A Luwian-Hattian Symbiosis and the Independent Hittites. In J.-G. Dercksen (ed.), *Anatolia and the Jazira during the Old Assyrian Period*. PIHANS CXI. Leiden, pp. 137-180; Michel, C. (2011), The *Kārum* Period on the Plateau. In S. R. Steadman and G. McMahon (eds.), *Handbook of Ancient Anatolian (10,000-323 BCE)*. Oxford, pp. 313-336; Michel, C. (2014), Central Anatolia in the Nineteenth and Eighteenth Centuries BC. In E. Cancik-Kirschbaum, N. Brisch & J. Eidem (eds.), *Constituent, Confederate, and Conquered Space. The Emergence of the Mittani*

State, TOPOL. Berlin Studies of the Ancient World 17, pp. 111-136 (<http://www.degruyter.com/viewbooktoc/product/129816>).

### 3.2. 文化の借用と順応

カニシュに移り住んできたアッシリア人たちは、その土地の様式で建てられた家を買ひ、その土地の職人たちが作った陶器を日常使用した。動物や舟をかたどった儀式用の陶器も好んだようである。実際のところ、アッシリア商人とアナトリア商人が住んでいた家屋に、建築の様式や材料の面で差はなく、アッシリア様式の陶器も製作されていなかった。アッシリア人とアナトリア人は、同じ環境のもとで、おそらく同じような食べ物を食べて生活していたと考えられる。アッシュル市では、ビールは大麦から作られていたが、カニシュでは、大麦と小麦から作られていた。また、アッシリア人は地元の工芸品を好み、金細工師に金製の宝飾品を作らせアッシュル市に送ったりもした。

アッシリア人の文書が発見されなかったら、アナトリアに彼らが住んでいたことを物語るものは何もない、というようなことがしばしば言われてきた。しかし、彼らの外国起源を示すものもいくつかあり、これには少々修正が必要である。例えば、アッシリア人は自分たちの神々を敬い、アッシュル神殿で、豪華な衣と宝飾をつけたアッシュル神像の前で宣誓した。また、アッシリア人は、メソポタミアの慣習通りに、家族の亡骸を、故人の身の回りの品々や黄泉の国への旅の必需品と供に、家の床下に埋葬した。これらの品々の中に、紅玉随とラビスラズリの豚の頭をかたどった宝飾品や、メソポタミア伝統の神冠をつけたブロンズ製の裸体の女神像等、アナトリアでは知られていない技術で作られたものがある。

アッシリア人は、自分たちの文書の中にヒッタイト語やフリ語から多数の単語を借用し、他方、アナトリア人はアッシリア人が用いていた楔形文字を取り入れた。しかし、後代のヒッタイト人がしたように、それで自分



図15 紅玉随とラピスラズリで  
作られた豚の頭



図16 ブロンズ製の裸体の女神像

たちの言語を書き表すことはせず、古アッシリア語を書き言葉として採用した。古アッシリア語は当時の外交語でもあり、アナトリアの王たちは、協定や条約、書簡等を宮廷の書記に書かせたのであった。また、アナトリア人の中には、ペルワ（Peruwa）のように、古アッシリア語で書いた文書を残した人物も何人かいる。古アッシリア語文書には、わずか200程度の略字しか用いられなかったので、読み書きができたアッシリア人は多かったと考えられる。そして、この状況が、地元の人たちにも読み書きを学ぶことを促したのではなかろうか。アナトリア人が書いた文書は、往々にして文法上の性（男性と女性）を取り違えたりする等の誤りを含んでいて、母語の異なる書き手によって作成されたことを物語る。

アナトリア人は、封印する際にスタンプ式印章を用いるのが常であったが、アッシリア文化の影響の下に円筒印章を使い始めた。彼らは、古バビロニア、古アッシリア、および古シリア様式からいろいろな要素を借用してアナトリア独自の円筒印章のスタイルを作り出した。そして、この古アナトリア様式を持つ円筒印章は、アナトリア人とアッシリア人の両方によ

って用いられた。



図17 古アッシリア様式円筒印章



図18 古アナトリア様式円筒印章

参考文献：Gräff, A. (2005), Thoughts about the Assyrian Presence in Anatolia in the Early 2nd Millennium. *Altorientalische Forschungen* 32, pp. 158–167; Michel, C. (2010), Les comptoirs de commerce assyriens en Anatolie: emprunts réciproques et acculturation. In P. Rouillard (ed.), *Portraits de migrants, portraits de colons II*, Colloques de la Maison René-Ginouvès 6. Paris, pp. 1–12 (<http://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-0051828>); Michel, C. (2011), The Private Archives from Kaniš Belonging to Anatolians, *Altorientalische Forschungen* 38, pp. 94–115.

### 3.3. 混合社会

アッシリア人たちはアッシュル市に家族を残してアナトリアに移り住み、しばらくの間そこで商売をし、そのうちファミリービジネスを引き継ぐため帰国するのが常であった。次第に多くのアッシリア人がカニシュや他のアナトリアの町に住むようになると、アッシリア人とアナトリア人の

関係にも変化が見られるようになった。アナトリア滞在中に、アッシリア人は2番目の結婚をし、多くの場合アナトリア人女性を妻に娶った。しかし、これにはルールがあり、2人の妻に同じ地位を与えることはできず（aššatum「第一夫人」、amtum「第二婦人」）、また、2人の妻を同じ所に住まわすこともできなかった。夫であるアッシリア人商人は、アナトリア各地を旅して商売をしたり、あるいは、妻子の待つアッシュル市に一時的に戻ったりしたが、その間アナトリア人の妻は、カニシュの家を守り、子供たちを育て、農作業に従事した。夫がアッシュル市に引き上げる際には、アナトリア人妻は現地に留まり、離婚の手続き後、家と家財道具および慰謝料をもらった。年若い子供たちは通常母親のもとに残ったが、父親がアッシュル市に連れて行くこともあった。

カニシュの商業地区に住むアナトリア人の中には、アッシリア人との商取引を通して次第に豊かになっていく者、アッシリア人に金を貸す者、アッシリア人の女性と結婚して、アッシリア人の共同体に同化していく者たちが現れた。アッシリア人寡婦は、結婚後男女が等しい権利を有するアナトリアの慣習にひかれて、アナトリア人と再婚することも多かった。

カニシュのアッシリア人口は前18世紀の後半急速に減少した。それにもかかわらず、アッシュル市との遠距離交易はしばらくの間継続した。マリ王室の文書によると、前18世紀にもまだ大隊商がアッシュル市とアナトリアの間を行き来し、アッシュル市の出資者も、カニシュに住みながらアナトリア各地で取引をしていたアッシリア人も、利益をあげていた。また、現地の銅と羊毛の取引に従事するアッシリア人もいたが、アッシュル市の同胞との接触を失い、時には没落したり、借金のためアナトリア当局に逮捕されたりする者もあった。アッシリア人がアナトリアを去ったのは、アナトリアの政治的状況の悪化が原因だったと考えられる。アッシリア人と共に、文字もアナトリアから消え去った。

参考文献：Barjamovic, G., Hertel, T. & Larsen, M. T. (2012), *Ups and Downs at Kanesh. Chronology, History and Society in the Old Assyrian Period*. PIHANS 120. Leiden: Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten; Michel, C. (2014), Considerations on the Assyrian Settlement at Kaneš. In L. Atici, F. Kulakoğlu, G. Barjamovic & A. Fairbairn (eds.), *Current Research at Kültepe/Kanesh. An Interdisciplinary and Integrative Approach to Trade Networks, Internationalism, and Identity*, JCS Suppl. 4, pp. 69-84.

[付記]

本稿は2014年5月28日（水）4時限目に、多摩キャンパス3号棟3453号室でセシル・ミシェル教授が行った英語の講義をもとにしている。この講義は文学部の2014年度「特色ある学部教育補助予算」を用いて実現に至った。